

里山管理を始めよう

兵庫県加西市

マツ枯れ

放置された広葉樹林

タケの侵入

高度成長期以降、利用が停止したことで高齢化が進んだ里山広葉樹二次林では、ナラ枯れの拡大、生物多様性の劣化、次世代の樹木が育たない、といった様々な問題が生じています。これを解決するためには、間伐ではなく小面積の皆伐によって、若い林が混じるモザイク状の里山林へと誘導していく必要があります。京都・滋賀で行ってきた社会実験に基づいて、小面積皆伐と薪による資源利用を組み合わせ、里山林の若返りとともに地域社会での生活に新たな価値を付け加える里山林管理システムを提案します。

講師 吉永秀一郎 （関西支所（現・多摩森林科学園））

社会実験の構成

京都府長岡京市と滋賀県大津市に試験地を設定し、地域社会との協働による里山管理の社会実験を行いました（右図）。市民団体や行政、地域住民自身が管理に参加し、小面積皆伐による薪の生産を行いました。また、薪ストーブのモニター家庭を設定して生活の変化などを調査しました。参加者は伐採した里山林の更新状況のモニタリングや補助作業にも携わります。



里山林の整備に必要なのは小面積皆伐

コナラを中心とした里山林を整備するための伐採法としては、皆伐が最適です。下層間伐はコナラの萌芽の成長を抑制し、アラカシの優占を助長させてしまいます。また、上層間伐は上層に集中し、下層には少ないコナラの個体群を壊滅させてしまいます。

小面積皆伐のプロセス



里山林の管理は伐ったら終わりではありません。持続的な管理のためにはモニタリングを適切におこない、必要に応じて獣害の防止、更新不良箇所への地域産種苗の補植などを実施する必要があります。

薪で里山林を活用する



薪ストーブによる薪の利用には、暖房としての満足感、化石燃料削減効果とともに、生活に豊かさの実感をもたらす効果が認められました。また、社会実験により、里山林が薪として資源になることが明確に認識され、地域住民、市民団体などにとって里山管理参加への有力な動機付けとなりました。小学校などへの導入により環境学習プログラムへ発展することも確かめられました。

手順を手引書にまとめました

以上の成果をもとに、里山林管理の手引書を作成しました。森林総合研究所ウェブサイトからもダウンロードできます。「里山管理を始めよう」で検索してください。

